

技術士 Professional Engineer

小学生に理科教室を出前

蔵前技術士会「理科離れ」防止に一役

若者の「理科離れ」が進み、科学技術創造立国を担う人材の育成が大きな政策課題になるなか、技術者最高の国家資格者である技術士が立ち上がった。

東京工業大学の卒業生の集まりである社団法人・蔵前工業会の公益事業の一環として、傘下組織の蔵前技術士会と神奈川支部の有志がボランティアグループを結成し、小学生を対象にした理科教室の出前に取り組んでいる。

「くらりか（蔵前理科教室ふしぎ不思議）」と名づけたこのボランティア活動は、理科に対する児童の興味を呼び覚まそうと今年5月、蔵前技術士会（会員技術士約130人、平成元年設立）に所属する東工大OBの技術士が中心になってグループを結成し、初めて具体化した。内田潤一会長、佐鳥聡夫事務局長のほか、江口宏明・ひととゆめのネットワーク代表ら会員外の理科教育専門家なども参加し、メンバーは現在、合計約20人。

さる8月24日、東京都大田区田園調布2

丁目の児童館で開いた第1回「くらりか」には、小学校3・4年生の児童16人と区内児童館の先生4人が出席。技術士5人と江口氏の指導で「浮沈子」の実験が行われた＝写真。

色付けした金魚型のしょうゆ差しの中に入れる水を加減して浮沈子をつくり、500ccのペットボトルの中に入れて、ペットボトルを外から押さえたり放したりするたびに、浮沈子は上下昇降。そのつど子供たちの歓声がわき上がった。

この後、リーダーの佐鳥氏がエピソードや事例もまじえて「比重と浮力」の原理を分かりやすく解説すると、子供たちは感心しきり。同じく指導にあたった技術士の田中満生氏は、「浮沈子に夢中になる子供も多く、理科離れといわれる昨今の現実とはほど遠い感じでした」と述懐している。

「くらりか」は当面、9日に東京都大田区の仲池上児童館、30日に田園調布二丁目児童館、来年2月19日には横浜市の日吉地区センターで開く予定だ。

巻頭言

現行の部会は、技術士法施行規則第2条に規定された技術部門を基本にして構成されており、技術士会活動の重要な位置を占めている。一方では、業際化、複合化、さらにはグローバル化が進む中、技術士コミュニティを高める上で、細分化から統合化あるいは総合化する方向で、より高度で広範な活動をしやすくする必要がある。

(技術士ビジョン21「組織・制度改革への行動指針」から)

佐鳥聡夫・蔵前技術士会事務局長の話「『くらりか』は今後、月に1、2回のペースでやっていきたい。主として小学生を対象とし、場所さえ提供してもらえれば、可能な限り全国どこへでも出かけ、科学原理を活用したおもしろい工作教材と原理の説明資料を持参します。

参加人数は20—30人を想定、参加費は500円以下の実費程度です」(☎03・3721・5631 satori@kuramae.ne.jp)



文科省が「アウトリーチ活動」提言

有馬朗人(あきと)・日本科学技術振興財団会長(元文相兼科技相、元東大総長)を座長とする文部科学省の「科学技術理解増進政策に関する懇談会」は、7月に「人々とともにある科学技術を目指して」と題する報告書を取りまとめ、「科学技術に関する国民の理解と感心を一層高め、今後さらに質の高い科学技術創造立国を構築したい」との熱い思いから、三つのビジョ

ン(①社会のための科学技術の実現②科学技術に関する知識や能力(科学技術リテラシー)の向上③「伸びうる能力」の伸長)を打ち出した。

この中でとくに重視されたのは、社会のための科学技術を実現していくための手段として、わかりやすく親しみやすい形で人々に科学技術を伝え、対話を深めて、人々の望みや不安を汲み取って科学技術活動に反映させていく「アウトリーチ活動」。こうした面からも、技術士への期待は大きい。